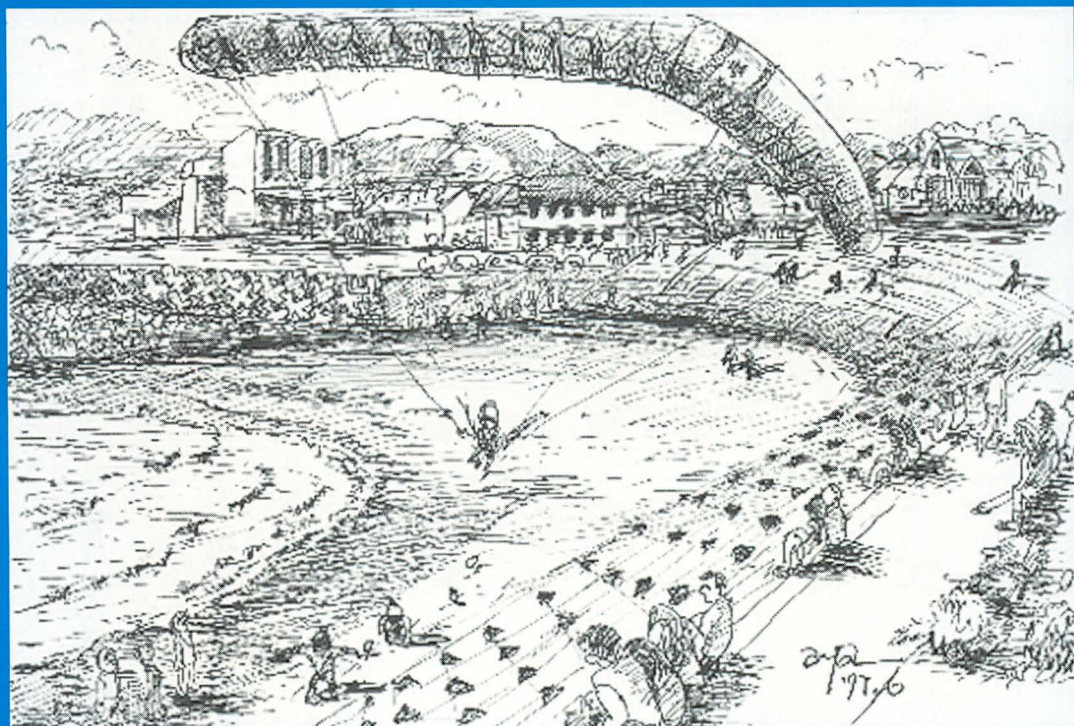


まちづくりネットワーキングえひめ

舞 とうん

VOL.53



双海町

特 交流と連携をめざすまちづくり 集

—おもしろ・こだわり・夢イベント—

- 「お手玉で手から心へ温もりを」
- 村上水軍のロマン復活「水軍レース」
- 命の水を育む「分水嶺サミット」
- 夢は汗かきです！ 「かまぼこ板の絵物語」
- 全国の吉田君集まれ！ 「吉田町サミット」

アングル

地域に頼られる商工会をめざして …… 愛媛県商工会連合会会長／平岡 利郎 …… 1

① 交流と連携をめざすまちづくり ②

—おもしろ・こだわり・夢イベント—

- 「お手玉で手から心へ温もりを」 …… 新居浜市／武田 信之 …… 2
- 村上水軍のロマン復活「水軍レース」 …… 宮 窪 町／村上 朋也 …… 4
- 命の水を育む「分水嶺サミット」 …… 久 万 町／田坂 泰範 …… 6
- 夢は汗かきです! 「かまぼこ板の絵物語」 …… 城 川 町／浅野 幸江 …… 8
- 全国の吉田君集まれ! 「吉田町サミット」 …… 吉 田 町／木下 正男 …… 10

論談—まちづくり—

交流時代を見据えての地域づくり …… 前瀬戸田町長／和氣 成祥 …… 12

キラリ光るまち

夢追いながら四万十の地で …… 高知県西土佐村／和田 修三 …… 14

リレーでちょっとトーク

- わがむらは美しく …… 城 川 町／久保田 修 …… 16
- やっぱり椋名が好き、吉海が好き、バラが好き …… 吉 海 町／村上 富香 …… 17

研究員活動を振り返って

- 楽しかったまちセン活動 …… 中村 博之 …… 18
- まちづくりは出会いから …… 大谷 基文 …… 20

地域を生きる

地域づくりって何 …… 川 内 町／白戸 謙一 …… 22

風おこしのちかい

シゴトの現場で出会うこと、考えること …… 宮本 清幸 …… 24

Information

- 媛のくにフラッシュ 〈新居浜市・今治市・生名村・久万町・津島町・一本松町〉 …… 26
- まちセンからのお知らせ …… 29

特集 「交流と連携をめざす

まちづくり」

今号のテーマ

おもしろ・こだわり・夢イベント

地域文化の伝承、住民意識の昂揚、観光宣伝、地域イメージの創出などを目的として、様々な地域活性化のためのイベントが各地で盛んに開催されていますが、「イベント疲労」という言葉も聞くようになってきました。

しかし、それぞれの地域の特性にこだわって、それをうまく活用したり、ユニークなアイデアや夢のあるイベントは、全国そして世界に地域の情報を発信できるものです。

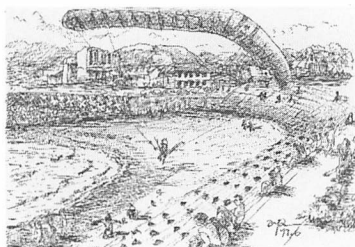
そこで、今号は、「おもしろ・こだわり・夢イベント」をテーマに、「交流と連携をめざすまちづくり」を特集してみました。

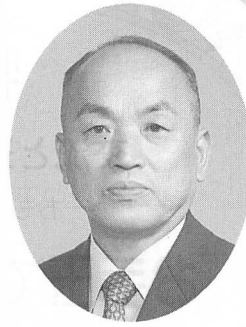
表紙の言葉

双海町へ寄り、夕日
を待つ事にしました。

夕日まで間があり、
散歩をしながら撮影場
所を見て、ふと空に
何か気配を感じ、見上
げれば、パラグライダー
が舞い降りてきま
す。すると若者たちの
大喝采。海からも引き
上げて来る若者。夕日
をイメージに取り込む
双海は、いつの間にか
若者まで取り込んでい
ました。

柳原 あや子





昭和三十五年に商工会法が制定され、地区内の商工業の総合的な改善発達を目的に、商工会が全国の町村部に設置されました。その数は現在では全国で約二千八百三十、愛媛県で五十二となっております。法制定から約二十年間にわたり、商工会の業務は商工業者に対する金融斡旋や経理・税務、労働、経営の相談・指導など経営改善普及事業が中

心でした。商工会はこの間、経営改善普及事業を懸命に推進したことで、地域の小規模事業者の指導団体としての地位を築いたと思います。

そして、昭和五十六年に、商工会法が一部改正され、「社会一般の福祉の増進に資する」ということが、商工会の目的に追加されました。

この年以降、国も県も商工会に次々と地域振興的な事業の予算をつけるようになりまし。商工会も行政と協調しながら、地域ビジョン策定事業やむらおこし事業、街おこし推進事業など地域活性化のための事業を積極的に展開してまいりました。

それから十年余りのこの期間には、商工会が地域の総合的な経済団体としての位置づけをより明確にした時期であると思います。

そして、平成五年には、「商工会及び商工会議所による小

規模事業者の支援に関する法律」が制定され、商工会機能の拡大強化が図られました。

しかしながら、二十一世紀を目前にした今日、情報化や規制緩和、国際化、高齢化などの進展により商工会地域を取り巻く環境は大きく変化しております。

このように急激な経済、社会環境の変化のなかで、多くの商工会地域では過疎化が進み、経済が停滞・衰退するとともに、小規模事業者の活動分野の縮小、事業所の減少が進んでおります。

このような状況のなかで、地域経済をリードしていくためには、商工会はどうすればよいか。

情報力の強化、市町村行政との連携強化、職員の能力開発などにより、商工会組織の強化をさらに進め、小規模事業者の指導団体として、また、地域の総合的な経済団体とし

て、企業の指導はもちろん地域づくりやまちづくりを強力に進めていかなければならないと決意を新たにしているところ です。

二十一世紀の情報化社会に対応するために、県下商工会組織では、平成八年度から三年計画でハード面、ソフト面から情報化対策推進事業を懸命に推進しているところで

「組織は人なり」、「まちづくりは人づくり」とよく言われます。時代の流れが一段と速い今日、能力開発事業にも十分に力を注ぎ、商工会に入された情報機器に十分対応ができ、かつ、企画力と行動力を備えた職員を養成し、商工会組織をさらに強化することで、商工業者の期待にこたえ、地域社会に貢献する商工会として、さらに頑張っていかなばなりません。

特集

交流と連携をめざすまちづくり

—おもしろ・こだわり・夢イベント—

『お手玉で手から心へ温もりを』

日本のお手玉の会

会長 武田 信之

快適な生活環境づくり模索

「おてだま」。語感には、そこはかとなく漂う、温かさがある。触れると、心が落ち着

き、母のことが思い出される。お手玉は、そんな不思議な力を持つ。

日本のお手玉の会が誕生したのは、平成四年九月。生みの親は、新居浜アマニティ倶楽部（天野征郎会長…会員三十八人）。アメニティ倶楽部は、昭和六十年十月に発足したボランティアグループ。新居浜市を、自分たちの手で快適な生活環境にしよう、という願い

から生まれた。活動の一つに、お手玉遊びの普及があった。

現代の子どもたちは、電子おもちゃに夢中。それは一人遊びである。機械を相手にした遊びでは心が潤うことはな



い。それが、子どもたちの心を寂しく、すさんだものにしていないだろうか。そこに着目した。

竹トンボ、お手玉など。昔の子どもたちの遊びは、道具から手作りで、自然を相手に、人と人との肌の触れあい、語り合いがあり、創造の喜びがあった。

中でもお手玉遊びは、おばあちゃんから孫へと伝えられた、日本の伝承遊びである。そこには、遊び方を教えるだけでなく、裁縫の指導、礼儀作法や昔話を聞かせるなどの、触れあいがあった。このお手玉を、現代に普及させる活動を起こした。

この活動を、より大きなものに発展させ、町おこしにつながる、継続していこう。そのため組織を作ろう。ということ、日本のお手玉の会が生まれた。

お手玉の活動は交流と連携

この特集のテーマ「交流と連携」は、日本のお手玉の会の活動そのものといえる。

交流の中心は三点セットのドサ回り。珍しい世界と日本のお手玉の展示、作り方教室と遊び方教室が出し物。段ボール箱に、お手玉と材料を詰めて、芸芸人の一座のようにイベントに参加する。興行の範囲は、市内県内はもとより、徳島、鳥取、広島、東京、北海道、そしてハワイにまで広がった。

二十三都道府県から七百人

全国お手玉遊び大会は、平成四年九月に、初めて開催して以来、毎年、新居浜市で行っている。競技は、一般と小

学生の団体戦と個人戦。参加者は回を追って増え、参加者の範囲も、二十三道府県に及ぶ。昨年は韓国からもエントリーがあった。

出場選手は、五歳の少女から八十歳のおばあちゃんまで、七百人を数え、観衆は六千人。

昨年からは、体の不自由な方のための「お手玉遊園地」を設け、お手玉遊びを楽しんでいただいている。

また、大会の前日には前夜祭を開き、各地のお手玉遊びの紹介、活動状況などの情報交換を行っている。



全国お手玉遊び大会

ハワイ訪問も四回目となる

「まつりインハワイ」へは、平成六年から毎年参加。お手玉遊び大会や、日本文化の集いのコーナーを設け、日本と同様、展示、作り方、遊び方教室を開く。

年齢、性別、肌の色や国籍に関係なく、多くの人が興味を持って熱心に参加し、精一杯、日本の文化の理解に努めてくれる。その態度には、いつも感動し、熱い涙が流れる。昨年、待望のハワイ支部が誕生した。今年も六月に出かけた。昨年までとは違い支部の人達と一緒に心の通った交流ができた。

現在、日本のお手玉の会の会員は、四十四道府県に六百人と国内に六つ、ハワイに一つの支部を持つ。会員や支部との連絡も、頻度が高くなってきた。

新居浜市の本部には、国の内外からの見学者が多い。オープンして四年を迎えるが、

外国からのお客様だけでも、百五十人を超え、お手玉は、国際交流に大きく貢献している。

二十三の団体で全国大会開く

連携では、まず、全国大会の実行委員会があげられる。大会は、日本のお手玉の会と実行委員会の主催であるが、実行委員会は、新居浜アメニティ倶楽部を中心に、新居浜市内の二十三のボランティア団体や企業で組織され、スタッフは百三十人にもなる。

この実行委員会による大会の企画・運営が、この大会の大きな特長であり、他に誇り得る点である。

さらに、写真絵本の「お手玉」(一、五〇〇円)が出版される。文は、西条市の児童文学作家・大西伝一郎先生がご担当くださり、日本のお手玉の会の監修で、文溪堂から八月に出版される。

課題は、大会の運営費の捻出

問題点は、大会運営費の捻出。これまでは、市内の企業からのご協賛金でまかなってきた。これからも、この形をしばらくは続けられざるを得ない。しかし、何か資金の調達方法を考えなければ、ご好意にのみ頼ってはいけなからい。この問題の解決が、これからの大きな課題といえる。

ともかく、現在の全国お手玉遊び大会を、国際大会、世界大会にまで発展させたい。そして、新居浜市が「世界のお手玉遊びのメッカ」になることを目指す。

三点セットのドサ回りに汗を流しながら、手から心へ温もりを伝える活動が続けたい。

●第六回全国お手玉遊び大会●

平成九年八月二四日(日)

九時三十分～十五時

リーガロイヤルホテル新居浜

団体戦・一般・小学生

個人戦・一般・小学生

(問い合わせ先)

日本のお手玉の会事務局

☎〇八九七―三六一〇六〇〇

特集

交流と連携をめざすまちづくり

—おもしろ・こだわり・夢イベント—

村上水軍のロマン復活 『水軍レース』

水軍レース実行委員会事務局

村上 朋也

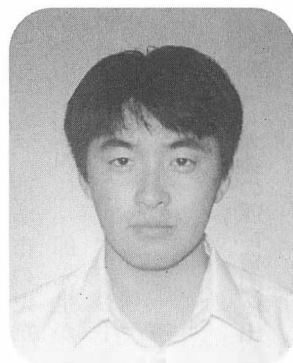
水軍レース復活

「水軍レース」大会の始まりは、平成二年に愛媛県で国民文化祭が開催された際、宮窪町において、海の文化を披

在の姿となりました。当初、三島五町を中心としたチームで行われていましたが、新聞報道、テレビ放映も手伝いしだいに知名度を増してきた大会は、昨年の第四回

露するため、水軍ふるさと会、漁業関係者らの協力により長らく廃れていた押し船競争を復活させたことにより、

国民文化祭での手応えが契機となつて、翌年から宮窪町で「能島水軍レース」と称して初めての水軍レースが実施されました。平成五年には宮窪町・吉海町・伯方町の三町共催となり名称も「水軍レース」と改め現



水軍ふるさと会

水軍レースと関係のある、次の二団体を紹介します。

「水軍ふるさと会」は昭和六十二年六月、町おこしブームの中、会員八名でスタートしました。これまでの活動では、三島五町の商工会青年部などに呼びかける「大河ドラマを呼ぶ会」の結成や、村上水軍を扱った小説「秀吉と武吉」をドラマ化し、地域のPRと活性化を狙った運動をするなど五町の若者達との交流に大きな成果をあげました。

また、国民文化祭から始まった水軍レース大会の「仕掛人」として新聞で紹介されるなど、島を売り出す発想を常に持った団体で、現在でも水軍レース大会の運営に大きな役割を果たしています。

今後、地域の交流、活性化の点で注目していきたい団体です。

大会にして、県外を含む六十チームと過去最多の参加となり、広域的な大会となりました。それも、大分県玖珠町チーム（来島水軍）、広島県因島市チーム（因島水軍）の参加により初めて、能島・来島・因島の「三島村上水軍」が揃い踏みし、県境を越えた連携を実現させました。今年の第五回大会は、参加七十八チームの熱戦と多彩なアトラクションで大河ドラマ毛利元就で注目を集めている「村上水軍」発祥の地として、宮窪町（能島）を今まで以上にアピールすることが出来ました。今後も三町及び各種団体の協力のもと成功への努力を続けたいと思います。



能島・鯛崎島

能島水軍太鼓

「能島水軍太鼓保存会」は昭和六十二年に能島水軍の偉業を偲びながら、能島水軍太鼓の普及・伝承に努め、能島水軍のふるさと「宮窪」の活性化に資することを目的として結成され、宮窪町の交流・観光づくりの一翼を担って活躍を続けています。

水軍レース大会をはじめ、近隣町村のイベントでは欠かさない存在となっています。また、太鼓チームの活動は活発で、昨年六月には、全国に十二ある古式泳法の流派の一

つ「能島流泳法（宮窪町能島が発祥の地とされている）」を今に伝える大阪浜寺水練学校の学校創立九十周年で太鼓を披露するなど、幅広い交流活動を見せています。

今年の水軍レース大会では、この能島流泳法が披露されました。

能島・来島水軍文化交流

水軍文化交流として、大分県玖珠町との交流があります。玖珠町とは、四百年前に、来島水軍の一族が九州豊後国森藩に一万四千石で移封された所です。交流の始まりは、玖珠町の森本通り軒先市実行委員会から届いた「祖先の地を訪ねたい」という一通の手紙からでした。地元の水軍ふるさと会との会談の末、平成五年十月二日両会の主催で水軍文化交流会が宮窪町石文化伝承館で実施されました。

鎧姿のふるさと会（能島水軍）が、バスから降りた軒先市実行委員会（来島水軍）の

前に立ちほだかり水軍大将村上武吉の通行手形を渡し、交流会が開始されました。交流会では、太鼓とほら貝が鳴り響く中、鎧に身を包んだ能島・来島水軍末裔の二人が固い握手を交わし、ついに四年ぶりの再会が実現したのでした。交流会は両町の水軍太鼓の共演でクライマックスに達し、成功のもと終えることができました。

これを縁として、現在でも水軍交流が続いています。今後も水軍文化の継承として交流の継続、広がりを持たせたいと思っています。

能島水軍口マンの里

宮窪町は、能島が昭和二十八年に国指定史跡となり、昭和四十八年には「能島水軍の里」として県より指定されています。この能島水軍・水軍文化を交流の起点として幅広い交流を目指しています。

今夏には、観光協会から「村上水軍、巖島合戦への道」

体験ツアーとして宮島町との交流の企画が進んでおり、歴史雑誌には、能島城の想像図が紹介されるなど水軍文化が様々な形で表れてきました。

今後は、西瀬戸自動車道の開通を控え「橋の通過点となるのではないか」という不安もあります。春の能島桜まつり、夏の水軍レース、能島水軍夏まつり、村上水軍資料館など水軍の歴史文化の魅力に「人の流れ」が誘われる。「能島水軍口マンの里―宮窪―」でありたいと願っています。



水軍レース大会

特集

交流と連携をめざすまちづくり

—おもしろ・こだわり・夢イベント—

命の水を育む 『分水嶺サミット』

久万町役場総務課企画室

次長 田坂 泰範

分水嶺（界）サミット テーマ「上・下流域の交流と連携」

分水嶺（界）サミットは、分水界を持つ市町村が共有する優れた環境資源とそれらが

県では三十一市町村に所在しています。

平成五年には水源地域における環境保全及び水質保全を図ることを目的として全国分水嶺市町村協議会が設立され、

育んできた歴史や伝統・文化をともに振り返りながら、豊かで快適な地域づくりを考えるため、昭和六十三年から開催され、今回で第十回を迎えるものです。
分水界……二つ以上の河川の流れを分ける境界、分水線
分水嶺……分水界となっている山脈

分水嶺の多くは市町村の境界となっており、全国では五百市町村に、本

本県では面河村、野村町、久万町が加盟しておりますが、本年度は、九月十日（水）・十一日（木）に久万町において記念すべき第十回大会が「上・下流域の交流と連携」をテーマに開催されます。

開催の趣旨

平成六年の異常渇水による松山水飢饉はまだ記憶に新しいところですが、日々の暮らしの中で水の大切さを改めて認識させてくれました。

分水嶺（界）に落ちた雨は、木々をつたい、森を縫って、豊かな流れとなり、緑と生き物を育みながら海へと下っていきます。田畑で作物を育む水、蛇口を捻ればあふれ出る



水、この水をたどれば森林に行き着き、水の流れによって都市に住む人々の生活と農村はつながっています。

しかしながら、周知のとおり、森林がある農山村では、人口の減少や若者の流出と加速する高齢化や農林家の減少など過疎化が依然として進行しており、耕作放棄地の拡大や水を育む森林の荒廃が進んでいるのが現状で、地域活力の低下とともに地域資源の維持管理そのものが困難な地域が次第に増加しつつあります。

現在、林政審議会などにおいて、河川の流域を単位に係自治体などが連携して森林整備に当たる流域管理システムの必要性や森林保護の財源



を受益に応じて負担することなどについて論議されていますが、過疎地域の農山村や農林業

開催日程

《場所》

久万町「上浮穴産業会館」

《日程》

第一日（九月十日・水）

全国分水嶺市町村協議会理事會

十三時～十三時五十分

全国分水嶺所在市町村等首長會議

十四時～十四時五十分

歓迎レセプション

十七時三十分～二十時

第二日（九月十一日・木）

開會行事

九時三十分～九時五十分

パネルディスカッション

十時～十二時

コーディネーター

宮口 伺迪（早稲田大学

教授、国土審議会専門委員）

パネリスト

泉 英二（愛媛大学農

学部教授、中予山岳流域林

業活性化センター顧問）

真貝 宣光（吉野川の源

水をはぐくむ会事務局長、

吉野川流域林業活性化協議

会委員）

が保有する水源のかん養や国土保全、あるいは食料供給といった機能は過疎地域はもと

篠崎 克己（愛媛県生涯

学習推進委員、元愛媛新聞

編集局委員・事業局長、元

上畑野川公民館長）

武井 糸（市民グルー

プ「水をきれいにする会」

世話人代表、主婦）

河野 修（久万町長、

森林交付税促進連盟副会長、

愛媛公有林野対策協議会会

長、全国自然休養村協議会

会長）

記念講演

十三時～十四時三十分

講師

浜 美枝（女優、農村ア

ミニティコンクール審査委員）

農山村問題についてオピニ

オンリーダーとして活躍す

るかたわら、農山村に住み、

農家生活を実践中

共同宣言採択

十四時四十分～十四時五十分

閉会行事

十四時五十分～十五時

より下流域にある都市にとつてもかけがえのない役割を果たしており、都市の将来的な発展のためにも上流域の農山村が健全に存在し続けることが大切となっています。

このようなことから、今回のサミットにおいては、過疎の農山村のみならず、その恩恵を享受する下流域の人々にも参加していただき命の水を育む森林保全や中山間の問題を共に考え、理解を深めることを目的に開催するものであります。

終わりに

近年、豊かな自然環境、美しい景観、個性あふれる伝統文化や歴史等を活用し、都市住民にも開かれたふるさとづくりを推進するなど地域の特性を生かした独創的、主体的な地域づくりが進められています。

久万町においても様々な施策を設立し、若者の担い手育成を図るなど、流域林業の活性

化事業の展開やふるさと事業による都市と農山村との交流事業、滞在型レクリエーションを楽しむふるさと旅行村、木の香漂う美術館や図書館、特産品の開発・販売を行っている物産館みどり、ラグビー場などにより開かれた農村リゾートづくりを推進しているところであり、これからも、住民が自らの地域に愛着と誇りを持つ生活、生産の場として「自然と共生する高原文化の町」を目標にまちづくりを進めてまいりたいと考えています。



特集

交流と連携をめざすまちづくり

—おもしろ・こだわり・夢イベント—

夢は汗かきです! 『かまぼこ板の絵物語』

ギャラリーしらかわ

庶務係長

浅野 幸江

ドラマのはじまり

石の上にも三年。一生懸命
だった三年は「365×3」
よりはるかに重い。物理的な
もの以外も計れる「秤」を自

が私たちスタッフの元気の素
であり、—名作劇場「かまぼ
こ板第二の人生物語」—だっ
たように思う。正に、ステー
ジも舞台裏もドラマ・ドラマ
の連続だった。

分たちの中に得
たせいかもしれ
ない。

全国「かまぼ
こ板の絵」展覧
会の企画は随分
まわりの方を驚
かせ迷惑を掛け
てしまった—と
いうよりかけつ
ばなし…と言
わなければなら
ないだろう。そ
して、それ故の
忙しさには「超」
がいくつも付い
たような気がす
る。が、元気で
頑張れたのは
「とにかく、回り
のみんながやさ
しかった」それ

出世払いで…

この企画は、平成六年六月
折笠勝之先生（洋画家）から
「子供たちのためになれば！」
とプレゼントされたかまぼこ
板の絵からヒントをいただい
た。かまぼこ板をキャンバス
にして「絵はいつでも誰でも
何にでも描けること」を提案
し、全国に向けて公募しよう。

百万人の共鳴を得られれば、
一万点ぐらいの作品は集まる
はずだ。そんなことを考えな
がら、まじまじと蒲鉾を見つ
めれば「これは海の幸と山の
幸からなる食文化の芸術品で
はないか」と、改めて感激し
たりしながら、スタッフ四人
話し合いを重ね、開かれたア
ートギャラリーとしての、—
百万人との出会い・一人の
美術展—への夢は大きくふく
らんでいった。が予算のつく
見通しはなかった。

人口五、四〇〇人の町に、町
立美術館「ギャラリー・しら
かわ」がオープンして一年、

「美術館だけでも贅沢なのに、
その上にお金のかかることは
もつての外、城川町の経済パ
ランスを考えよ」というお叱
りの中から、チラホラ聞えた
「苦勞を承知で挑戦したいとい
う職員のやる気をつぶすこと
はない。」という二、三の声を
柱に「とにかく作品が集まれ
ばなんとかなるだろう」とい
う結論で出発したわけだ。

「出世払いで…：…：…なん
とか!」の一途なお願いに、
沈黙がしばらくあって「こじ
やんとえい企画やき、まかい
ちよつてや」と返事が返って
きた。自分たちの勉強だと思
えばなんとかなるだろう。と
も言っ下さつたのは高知県
のデザイン会社のお二人。あ
りがたいことに、時ならん出
世払いの契約でポスター、チ
ラシ、キャラクターのデザイ
ンが決まったのである。この
企画に火蓋なんていうカッコ
イイもんがあったとすれば、
「土佐弁のやさしさで切られ
た」と言いたいと思う。審査

員就任へのお願ひも大変甘えたことで、先生方に手紙を書いたり、電話をかけた。とにかく冒頭に企画の主旨を説明した上で「……でもお金はないんです。ですから、とにかく松山空港までブーンと飛んで来ていただければサーアッとお迎えにまいりますから！」と必死だった。あまりにも真剣すぎて「窮鼠猫を噛みそう」だったのか、先生方五名、出世払いで審査員を引き受けて下さったのだ。なんとか展覧会の目鼻が整った。

応募点数 一三、三八二点

それから後は、「まあ、まあ、どうならえ、たまるかえのお」という皆さんのやさしさとラジオ・テレビ・新聞をはじめとするマスコミの力も借りて、てんやわんやの内に応募総数一〇、八九一点、応募者にして一二、一〇〇人、なんとかまぼこ板の数は二三、〇〇〇枚にものぼったのである。その上に全国各地から寄せられた二、〇

〇通にも余る手紙に励まされながら、平成七年七月末から十一月末まで約四カ月間の展覧会を開催。その間二〇、一〇人と町民の約四倍の入館者を迎えることができた。「かまぼこ板・第二の人生物語」と銘打った時には思ってもみなかった、生・死を含む人生模様のエピソード。また、大震災とオウム真理教に明け暮れた平成七年の中で、たくさんの人たちとの「かまぼこ板のご縁」にささえられ、それが更に輪を広げ、第二回継続への勇気につながっていった。

平成八年の第二回は第一回を二、三〇〇点余りも上回る一三、二二〇点の応募作品、応募者数は一五、〇〇〇人になり、「予想以上にレベルアップし、色彩もアイデアも豊かな力作ぞろい」と審査員の先生方を驚かせた。展覧会開催期間（二〇五日）の来館者二七、二〇〇人となった。

そして、第三回の今年、バタバタやてんやわんやは相変

わらずの中で、ありがたいことに応募総数一三、三八二点、応募者数一六、四五〇人となり、「うーん……今年は戦後の日本を背負って立った人たちの頑張りがスゴイ！日本人の心意気を感じるねえ……、真面目で、一生懸命で……。作品を見ていると思わず衿を正したくなるよ。それにしても、みんなうまいなあ。俺、描けないよ」と審査員の先生方をうならせた作品達。

柚子いんすの根っこ

私たちスタッフ四人一六〇万人との出会い一六、四五〇人の美術展に向けて、ない知恵しぼって熱を出したり：：大汗かいたり、大恥かいたり、時には涙も流したり……。最近いつも冷汗かきながら、集中、熱中、夢中で頑張っている「夢」がかなうことも知った。

—ああ……夢は汗かきだったんだ——と大発見。

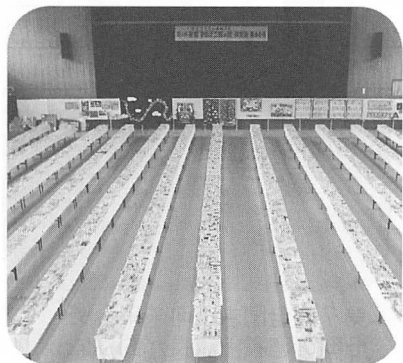
子供の頃に祖母からよく聞

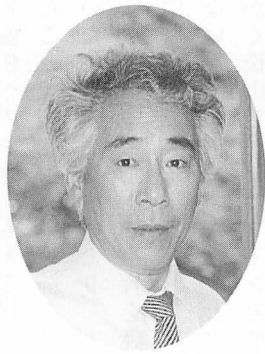
かされた「桃、栗三年、柿八年、梅は九年で花咲かり、柚子いんすの大バカ十八年」の言葉をかみしめながら……この全国「かまぼこ板の絵」展覧会が城川の土壌深く染み込んで、「柚子いんすの根っこ」になれたら小さな文化の実が一個ぐらい実るかもしれないな……とかすかな期待。

そして、やっぱり人生は人との出会い——感動は人生のきらめき。——「ギャラリーしろかわ」は生命の息するところになりたい！——と思っている。

第三回「かまぼこ板の絵」

審査会場





特集

交流と連携をめざすまちづくり

—おもしろ・こだわり・夢イベント—

全国の吉田君集まれ! 『吉田町サミット』

吉田町企画課

課長 木下 正男

和六十二年の秋のことで、鹿
見島、広島、新潟、埼玉、静
岡へと：：初めて訪れる全国
の吉田町、そして各町長との
直談判。

少々なことには物怖しない

新しい風おこし

全国にある同
名の吉田町は六
町。町おこしの
一端として姉妹
縁組みを結び交
流を深めていけ
ば町に新しい風
を起こすことが
出来る。

そうした考え
を町長に話した
のは今から十一
年も前のことだ
がまるで昨日の
ことのように思
える。『木下君私
のかわりに特使
として全国の吉
田町へ行って下
さい』それは昭

私です
がすべ
ての町
長から
O・K
をとら
なけれ
ば成功
とはい
えない。

自然と話にも熱が入る。その
かいあつてか
『いいでしょう！やりましたよ』
この言葉の響きは今でも心地
良い。

東京での全国町村長会に照
準を合わせて六町の町長会議
をセット。事業の趣旨、交流
の概要と話しは進み、堅い握
手で幕を閉じた。

その時はテレビ局や新聞社
も取材に来ておりムードは一
層高まった。

その数日後開催した全国吉
田町議長会議も盛会のうちに
終わった。それから二年間の
交流準備期間を設け、年も新
たな平成元年十月十五日、愛



第7回全国吉田町未来会議
6町の町長・議長が釣り体験

媛の吉田町で第一回全国吉田
町未来会議を開き姉妹縁組書
に調印の運びとなった。

相互のぎずな深まる

あれから九年が過ぎた。そ
の間に相互の交流が深まり学
校間ではホームステイや声の
便り、作品交流、スポーツ交
流、わんぱく親善大使等。文
化面では絵画、書、写真、広
報誌等による交流。産業面で
は各町の特産品の展示コーナ
ーの設置や販売。
又全国吉田町女性大会等を
通じての女性交流や議員相互
の交流会等それぞれの人々が
その町を知り、語り合い交流

の輪を広げていった。そうした一つ一つの積み重ねが地域の活力を生む要因として育まれていった。そうしたものは目に見えないものだが時の経過とともに芽吹いていくと確信しています。

又ある年には、ライオンズクラブ相互の姉妹縁組みも結ばれたし、昨年は災害時における相互援助の大会決議により現在援助協定の調印に向けての作業中であり、同名のよしみで結び付いた相互のよしみはより深まっています。

吉田拓郎の作詞・作曲による「吉田町の唄」の製作・みかんワインやイメージキャラクターも出来ましたし、町のシンボルマークやキャッチフレーズも後に続いています。

キャッチフレーズ

『山なみに海とみかんがあうまち』

こうしたまちおこしは一人一人が住んで良かった、これからも住みたいと思うような施策や環境づくりであり一過性のイベントでは意味があり

ません。

私のまちでは他に全国フルーツサミット、中国象山県との国際交流等多岐に渡って刺激を求め、さらなるネットワークの強化に務めながら地域からの情報発信をしております。時代はまさに胎動し金融再編等のビックバンをくりかえし二十一世紀へのうぶ声を上げると共に生みの苦しみも味わっています。

二十一世紀の地域間交流

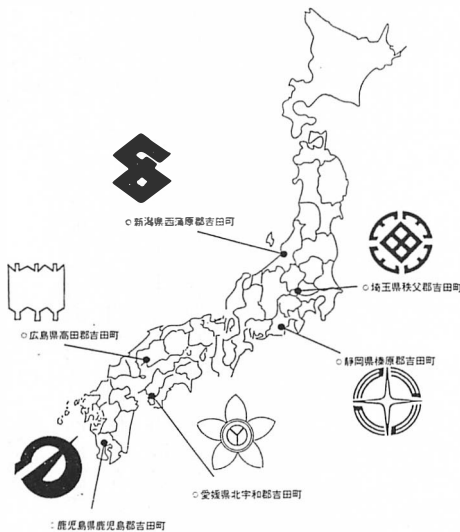
二十一世紀の日本は多様な個性を活す

社会の形成に力を入れるでしようしそれは私の町にもいえることとです。ベンチャーパージネスの台頭や通信で



第7回吉田町未来会議(愛媛・吉田町)

全国吉田町位置図



は地上波放送のデジタル化が必須でありイントラネットの拡大や実験段階にあるネット型電子マネーの環境づくりもそのスピードを増しており、こうした勢いが新しいネットワークを構築しマルチメディアもより完成度を高め、より身近なものになっていく。だからこそ我々がそれを使いこなしていくセンスと技術こそがこれからの町づくりに必要なのでできないものとなるのに地域でのインフラ整備はどうしてもハード中心にな

りがちで地域の独自性を発揮できにくい現状にあります。二〇一〇年には日本のマルチメディア市場は百二十三兆円の規模になるといわれています。そして二百四十三万人の雇用を生み出すと考えられます。それまでに光ファイバー網を張り巡らす作業は今まさに行われている。こうした時代に対応できる地域間交流の在り方をもっと真剣に考える必要があるのではないかと自問するこの頃です。

交流時代を見据えての 地域づくり

前瀬戸田町長 和 氣 成 祥



最近、交流という言葉が盛んに使われるようになってきた。人間の持つ「豊かさの価値観の変化」富から時間へ更に空間の豊かさへと、次に「経済構造の変化」従来の製造業中心の輸出型産業が経済摩擦等の影響で地盤沈下する反面サービス産業を含めたソフト型産業が台頭してきた。こ

うした環境の変化を受けて国が現在策定中の次期全総計画では「交流人口による地域の活性化」を施策の中心テーマの一つにしようとしている。先の、四全総での定住政策失敗の反省結果とはいえ時宜を得たものとして期待できる。しかも、交流という極めて抽象的概念が国策の中で明確に認知されることにも大きな意義がある。

我々は今こそ交流の意義を十分に認識した上でこれを地域づくりに活かさねばならない。ここで都市の起源を探つて

みよう。日本では城下町を除けばその大半は宿場町か港町を起源としている。これ等は何れも人や物が集散する場であり、同時に情報や知識の交流する場でもあった。これを求めて人が集まる・人が集まれば多様なサービスが発生する・充実したサービスは更なる人を集めやすくする。この繰返しが都市生成の過程であり、交流こそが地域づくりの原点であることを物語っている。

長い間の物造り中心の経済発展の中で見落とされていた交流の大事さが再認識されようとしていることは有意義である。併し一方では交流・交流と声高に言えば言う程、行政はその部分だけを切り出し急いで外向けの事業をしようとする短絡思考の恐れもある。

都市の生成から学ぶことは、交流が新たな生活空間をつくり生活空間の充実が新たな交流機能を創り出す、即ち生活

空間と交流空間は同義語であり交流空間を特別視しないことが大事である。外向けの施設型の空間整備は曾てのリゾートブーム時代の空間づくりの愚を繰返すことになる。

誇れる豊かな生活空間ができたなら、それを交流空間としてアピールする為の若干の施設や仕掛けは必要であるが、ここでも行政が犯しそうな過ちは、事を急ぐあまり直ぐ他自治体の成果を真似たり地域づくりのメニューを一気に取揃えようとするところである。結果として中途半端で無個性な魅力の無い地域ができ上ってしまう。本来、今日ある地域が長い年月の集積の成果であることを思えば、焦らず将来を見据えて時代の変化やニーズに適確に対応しそれを集積することこそが必要である。そしてその集積の中で地域個性を創出することが交流時代の地域づくりの要諦であろう。

自然・歴史・住民は地域個有の資源でありこの活用こそが地域個性となり、更に地域づくりに際しハード・ソフトを問わず一流を演出することも個性化への有力な手法である。しかも、一流の演出は一流の人を集めよりレベルの高い交流が期待できる。交流による刺激で住民意識が活性化し、さらにそれが地域の活性化に繋がることを期待する。より高質な地域活性化をうながすことになる筈である。

ここで私が携わった瀬戸田町のささやかな地域づくりの成果を説明し参考に供したい。私が町長に就任した昭和五〇年当時は一次（柑橘）二次（造船）三次（観光）と順調に推移してきた地域産業がどれも破綻を見せはじめた頃であった。そこで、爾後の町づくりの軸を将来性に富んだ観光に求めることにした。

当時百万人を越える観光客を擁していたが実態調査をし

て驚いた。町内での観光消費は人数で二五％金額で七五〇円であった。百万人と称する実態は七五〇円消費する観光客二五万に過ぎなかった。まさに立寄型観光地の宿命である。そこで解決策として瀬戸田を目的にする人を呼ぶ方策として「滞在保養型の観光地」を目指すことにした。更に、それを実現するための町の個性化を文化に求め、平山郁夫画伯の「画家としての感性は少年時代過した故郷の佇まいの中で養われた」の言葉から、平山芸術の少年時代の感性を育てた環境であるとして「文化の薫る町づくり」を町づくりの基本テーマにした。

最初に手掛けたのがベルカントホールであった。当時宮城県のパツハホールが世界一の音楽ホールと称していたが、当方はパツハを越える世界一を目指そうと完成させたこのホールは内外の高い評価を受け一流がもたらす成果を肌感に感じることができ爾後の町づく

りの価値ある出発となった。次に手掛けたのが隔年に実施される「島ごと美術館」と称する野外彫刻の設置事業である。三人の著名な評論家それぞれから推薦を受けた作家が島を訪れ自らが設置場所を探しその場に最も相応しい作品を製作設置するシステムで世界でも例がない手法として高い評価と注目を集めている。現在島の処々に一四点の作品が設置され来訪者の足を留めさせている。

平山画伯から出発した「文化の薫る町づくり」の締括りは平山郁夫美術館である。その美術館は去る四月六日に開館し一カ月間の特別展を先に終えたところである。予想を遙かに超える成果には我々自身も驚いている。因に入館者数八万三千人、売上一億二千万円であった。特徴として
 (一) 耕三寺観光客と殆ど重複していない。
 (二) 比較的長時間滞在型で島内を散策する。



平山郁夫美術館

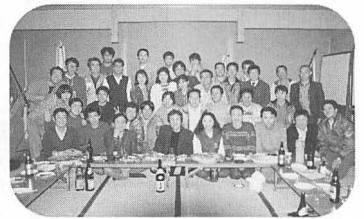
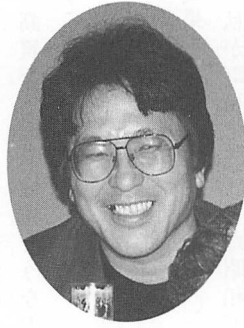
(三) 比較的高額消費である等である。

架橋で本土と陸続きになって以来、港の利用者が激減し耕三寺迄の参道商店街も無聊をかこっていたが、美術館オープン以来往年の活況を取り戻し対応に忙殺されていた。美術館の波及効果は館の売上の三〜四倍といわれていることからその凄まじさが想像できるであろう。
 本町が多年にわたり手掛けてきた文化をテーマにした滞在交流型の町づくりに確かな手応を感じている昨今である。

キラリ光るまち

夢追いながら四万十の地で

高知県西土佐村野塾代表 和田 修三



二十一世紀へ向けての村の振興計画のメインテーマとして「山川と人が輝く四万十の星」を掲げ、貴重な自然資源を輝かせ、その為には人が輝いていなければの想いで村づくりの指針としています。

西土佐村はその名の如く、高知県の西部に位置し愛媛県松野町と隣接する人口四千人余の山村です。高知市へも二時間半、松山市へも二時間半という雑踏からかけ離れた山紫水明の地で、日本最後の清流と言われて久しい四万十川が村の中央部を南北に雄大に流れ、人間性回帰の場、カヌーのメッカとして、全国各地からの来訪者の多い昨今です。

若者が住みたくなる村づくりの為、今いる人が楽しく輝いていることが必要だとこのことから、人材育成事業に積極的に取り組み、高校生の北海道農業体験や、青年国内交流研修、海外研修を毎年行っており、その人材育成の一環として、「野塾」というグループを三年前に結成しました。この活動について報告します。

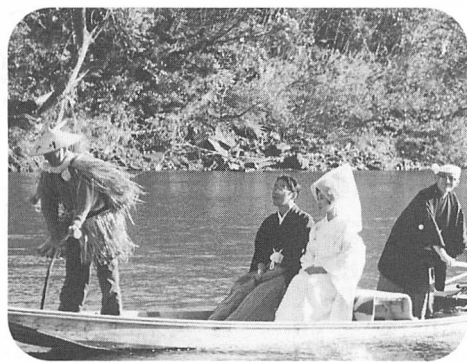
の何かがよく判らない、この村で一生住み続けるのだから、住んでてよかったと思える生き方をしたい。そんな声が物静かな青年の中から聞こえ、自分達の住んでる村をみつめながら、夢を語りあい、その夢実現の為にグループにしようとの指とまれ方式で募ると二十、四十才代の二十人程が集り、結成。

年の夢を叶えろうということ、早速、実行委員会を結成し、手づくりコンサート実現に向けてスタート。プロダクションとの交渉からはじまり、半年後に日程決定。ポスター、チラシ、チケットまで、手づくり、何夜も売りあげ確認の会を開き、楽しくその日を迎える。手づくりコンサートらしく、照明担当は野塾生、この担当だけは胃が痛んだとのこと。大盛況で、コンサートも盛り上がり、皆が酔い終了後、後片づけの後、岡林御一行様との懇談、神様と同座する喜びの顔があちこちに、従来のやらされイベントにありがちな、おおのダレた。もう次はいやせよ。が無く、満足感に溢れ、又やりたいねの感想。

こんな想いが二年後に又実現する。塾生の一人が河島英五に逢いたいと―何日か前にTVでカヌーの川下り旅が好きだという話を聞きました。ギターを片手に四万十川公演

を四万十川カヌーの旅とセツトで実現できないでしょうか——という手紙を送り、この情熱に野塾でやろうと、いうことで、カヌー下りセットの公演が昨年四月に行われ、四万十にいるからこそできた企画だったなあと、共に喜んだことである。

このように、この村だからできるコンサート、公演者とのスキンシップのとれるものを、今後も定期的にやっていたらと思っている所へ、来年合併四十周年、やれそうだなと、胸わくわくとときめき



中。

皆が集う中で、村をみつめるとやはり高齢化の話がでてきて、老人クラブとの交流がはじまる。おらじ、づくりや懇談の中で、大先輩達の技の巧さやユーモアセンスの良さに驚いたり、感心したり、喜ぶことの多さに、ふれあいの大事さを痛感したことである。

この塾が感動を与えた話を最後に、昨年の九月に千葉から観光で四万十川にみえた女性と塾生の一人がいい仲間になり、何とも急に年内の十二月十四日に挙式をすることに。四万十河原でやりたい。何？十二月だよ、いくら南国土佐でも師走の中旬、雪だつて考えられるのに。

もうやぶれかぶれ、運を天に任せてやるつきやない。と、大道具づくりから小道具づくり、会場設営、当日の企画進行まで、野塾に任せられ、さあ、当日、何と絶好の十二月らしからぬ小春日和。

家を出、真下にある四万十

に架る沈下橋を歩き、河原の式場へ、河原には石で寿の文字が。地域の人多勢が沈下橋から見守る中、三三九度、式の後は、親父船頭の待つ川舟へ、赤いじゅうたんを敷いたバージンロードを歩き上舟。

両人が親父の舟頭により沈下橋の上下を遊覧、その後から千葉の両親を乗せた川舟が、四万十の花嫁そのものの図にギャラリより「ようこそ二人」一同の記念写真も河原で撮影し披露宴会場へ。四万十見降ろす高台にある僻地集会所。金屏風ならぬ六畳分に拡大した四万十川のパネル写真が前方に、その両端にカヌーを吊るし、これも四万十づくし。お偉いさんのあいさつも無く、司会の巧みな話術、進行で宴は笑いの連続、そして最後は涙、涙

——こんなに贅沢で素晴らしき結婚式を有難う。娘は本当に幸福者です。こんな人達がいるのだから何の心配もしていません——

花嫁の父の言葉にやっつてよかった。やれてよかったなあ。ちなみにこの時の司会者が双海町の若松課長で、忙しい所、出張先の今治からかけつけて戴き、開宴五分前に到着という離れ技。

この塾をはじめめるきっかけをつくってくれたのが、この若松課長との出逢いであり、人が人を育てることを学び、色んな地域に触れ感じ、刺激をうけてきたことからこうした取り組みができるようになったと考えます。

まだまだ緒についたばかりの塾で、村づくりの役に立ってないけれど、酒と交流を大切にし、地域をみつめる目を肥し、夢語りながら、心の過疎にならぬ人を増したいと考えてます。

いつも愛媛でお世話になってますので、お逢いできたら暖かい刺激を下さい。そして、四万十へ御出の際は是非御一報下さい。

☎(〇八八〇)五二一一一一

私の住んでいる城川町は、松山市から南へ約七十五キロメートル、高知県との県境に位置する人口約五

千四百人の小さな町です。豊かな自然の中に温かい人情が息づく伊予の国（愛媛県）の最も奥まったところにあることから、「奥伊予」と呼ばれています。

城川町では、昭和五十八年から「わがむらは美しく」運動を提唱しています。この運



動は、私たちの住む町の生活環境とそれを囲む農地環境、さらにそれを取り巻く森林環境を美しくしようというものです。この運動の一環として、花いっぱい運動を行っています。公園をはじめ、国道や県道の緑地帯などに花壇を整備し、四季折々の花々が街中を飾っています。

また、豊かな自然と細やかで温かい人情の里というイメージで観光開発に取り組んでいます。五つの拠点を設定して、小規模ながら長期滞在型の保養地をめざしています。宿泊施設としては、宝泉坊温泉を利用した「宝泉坊ロッジ」と「三滝ロッジ」があります。「三滝ロッジ」周辺には、ドイ

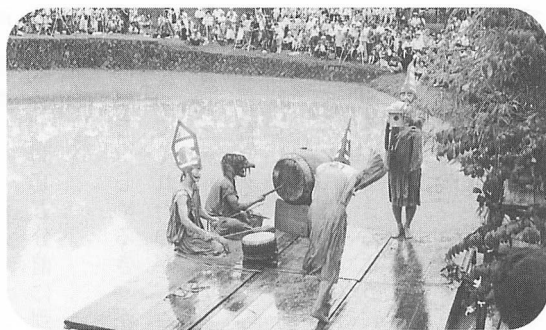
ツのマイスター直伝の製法による手作りハム・ソーセージを製造・直売している「城川自然牧場」。地球の大陸移動などを裏付ける地層として有名な黒瀬川構造帯などを紹介している「地質館」などがあります。

平成五年に建設された南予初の自治体画廊「ギャラリーしろかわ」では、著名作家の日本画、洋画のほか、町内の子供たちの作品を展示しています。今年で三回目になる「かまぼこの板の絵の展覧会」が七月二十七日から十一月二十四日まで開かれます。

昭和六十一年森林浴の森日本百選に選定された竜沢寺緑地公園もあります。

イベント・祭りでは、先ほども述べましたように「かまぼこの板の絵展覧会」や「宝泉坊温泉祭り」「奥伊予牛（ぎゅう）ニバル」などを行っています。七月六日、奥伊予の奇祭で有名になった「どろんこ祭り」が行われ、県内外から約五千人の観

光客が訪れました。私も何年か前には、参加していました。このように私の住んでいる城川町では、いろいろな取り組みで町づくりを行っています。観光ポイントもありますので、休日には是非城川町に遊びにきてみてはいかがでしょうか。



どろんこ祭り

『わがむらは美しく』

城川町

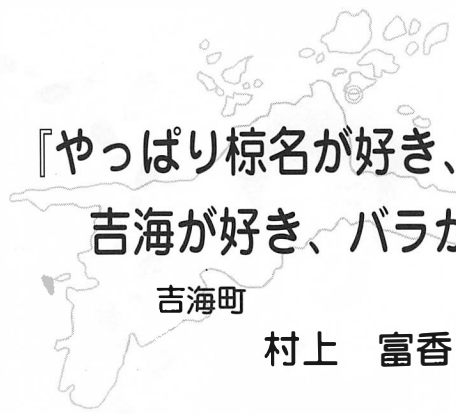
久保田 修



『やっぱり椋名が好き、 吉海が好き、バラが好き』

吉海町

村上 富香



青年団活動の場が、町から郡、県と、どんどん広がっていった。その度に多くの友人や仲間が、県内外にでき、あちらこちらの地域を見る機会にも恵まれた。しかし、吉海や椋名で何かできる事はないだろうか。橋は架かっても受け皿となる物や人物（集団）が無ければ置き去りにされてしまう。と、常に思い始めたのは、越智郡の会長を引き受けた頃だった。

平成九年六月一日（日）
私が長年待ち望んでいた、
第五回ようみバラ祭りの日
だ。

今回、バラ祭り初参加。地元、椋名（ムクナ）って言いま
すヨ。大きな椋の木があるんで
すヨ。青年会の一員としてこ
の場にいることが、とても嬉
しい。前回までは、私の人生
に大きな影響を与えてくれた
青年団の郡や県の役員として
研修・体育行事の運営のため
に、毎回町外へ。

不思議と他町村の事は良く知っているのに、自分の住む町は見えていなかった。この時期から吉海再発見が始まった。内なるものを見据えるために外を見る。とても大切な事だった。

そして、やっぱり吉海が好き、椋名が好き、地元椋名に村おこしの起爆剤となる集団ができればと願っていた。こんな思いでいる私に『わしらの子どもの頃か

ら見よったら、祭りにしても何にしても活気が無くなった。子供らに、わしらのおもしろかった思いをさしてやらんといかん。長いこと青年団やりよったんじゃけん一緒にやらんか。』と会長が声をかけてくれた。即OK。これで私を大きく育ててくれた地元社会に恩返しができる。

会長と同じ思いを持ち続けていた仲間達も集まった。他地域から嫁いできて、この地に根づこうとしている会員のヤングミセス達の協力。

こうして平成九年三月、椋名をこよなく愛する集団、椋名青年会が発足。まんざら捨

てたものじゃない。ちなみに、バラ祭りのこの日、鯛めし、とうもろこし共に、大盛況の内に完売。まずは皆の協力で大成功。この状況、誌面で伝えられないのが残念。

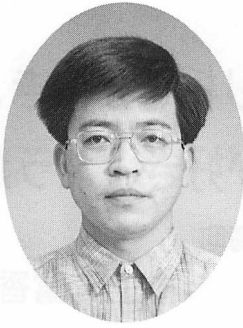
連日、バラ園にはその魅力に触れようと町内外から多くの人達が訪れている。朝露光るピロードのような花びら、昼間の咲き競う大小、色とりどりの花、夜は甘美な雰囲気をかもしだす。お互いの存在を打ち消す事なく補い合っている個性を発揮している、そんなバラのどれもが大好きだ。

青年団活動を終えた今、生まれ育った椋名青年会の一員として、橋の架かる町、バラのかぐわしい香りただよう町、吉海を椋名をあくなき探究心と希望を捨てず、活気あふれるものとなるよう、微力ながら応援していきたい。

私達の青年会は、歩み始めたばかりです。



吉海町バラ公園にて



—研究員活動を振り返って—

“楽しかったまちセン活動”

愛媛県庁 中村 博之
(前主任研究員)

平成6年4月に、(財)愛媛県まちづくり総合センターへ派遣され、以後3年間お世話になった。当初は、センターが財団法人という第三セクターの組織で、しかも今まであまり馴染みのない「まちづくり」という仕事であり、何をやっていいのか戸惑いがあった。また、まちづくりに教科書はなく、法律、規則、マニュアル等で仕事をしてきた者にとっては、暗中模索の日々が続いた。まちセンに来て、まず驚いたのは、ミーティングの時間が長いことである。ミーティングといっても今思えば、職員研修を兼ねての意味合いがあったと思う。当時は、一本松町のO君(一人だけ残留)が中心となり、何を決めるのにも、まず、議論ありきだった。センターには、当時職員として、所長(県OB)以下研究員5人(県派遣

1人、市町村派遣3人、農業団体出向1人)、臨時事務員2人の計8人(現在5人)がいたが、スタッフ制のため、研究員に上下関係はなく、いたって自由な討論となった。県外研修の内容、情報誌『舞たうん』の編集、全国まちづくり情報の活用等について担当者案を徹底的に叩くという作業が繰り返された。

私が一緒に仕事をした研究員は皆個性派ぞろいであった。行動派理論派、哲学者風、情報通、気配り名人、段取り名人等々多種多様な人材がそろっていた。センターでは、机上の事務処理能力があるかないかということより、外へ出て、人に会ったり、まちづくり等の情報を入手しながら、様々な情報を発信する能力が重要視されていた。

まちづくり人に必要なのは、ユニークな発想とそれを説得する力(話術や文章力)であろうか。双海町のW氏には、ピットリあてはまるのである

が、一般の人にはなかなか難しい。研究員も県内外のまちづくり人と会って話したり、各種のシンポジウム、フォーラム等に出席して、自ら考え、情報発信できる力を身につけていくのであるが、疑問を持つたり、納得しなりの繰り返して、2、3年がアツという間に過ぎてしまう。

まちセン活動で印象に残ったこと

活動の中で印象深いことを列挙すると、

舞たうん五〇号(センター十周年記念)の編集で、まちづくりトークや特別寄稿、論談、まちづくり雑感等を企画して、まちづくり関係者のご協力を得て、何とか記念号らしく発行できたこと。

ふるさと再発見・創造塾(県主催)で創造塾生と一緒に研修し、その後もお世話になっているが、創造塾生は、行政から民間まで幅広いということもあって、ユニークな人材が多く、熱心に楽しみな

ら創造塾での研修ができたこと。

えひめ地域づくり研究会議フォーラムを始めとした各種フォーラム（シンポジウム）の裏方として、何回となく準備等に携わり、研究会議のメンバーや講師の方たちと知り合いになれたこと。

県外研修で、鳥取県智頭町、東伯町、香川県直島町（直島文化村）等様々な地域でお世話になったこと。（まちづくりの先進地では、特に情熱をもって頑張っている人が必ずいることがわかった。そういう人たちの話を聞いてみると、なぜかやる気がわいてくるから不思議である。自分のやりたいことを表現するのが、うまいということであろうか。そういう方たちの話を聞いたことが、私のまちセン活動の糧となったことは、言うまでもない）

肱川町で開催されたドラゴンポートレースに“まちセン”のメンバー（OB含む）と一

緒に参加し、結果は散々なものであったが、みんな楽しく汗を流し、県内外の参加者との交流を図れたこと。

その他、地域づくり団体全国協議会の主催で、まちづくりの先進地である新潟県安塚町で研修を受けたり、また島根県匹見町、石見町、広島県熊野町、大分県直入町他を訪問し、まちづくりについて見聞を広めることができたことなどがある。

まちづくり人心得

まちづくりの基本は、人づくりということ、県内外で先進地訪問や塾活動等様々な研修が行われているが、やる気のある、人を引き付ける魅力のあるまちづくり人（リーダー）に、そうたやすくならぬわけではない。10年先を見越して、着実にあきらめずに活動を続けていくことが必要となる。

全国コーディネート情報交換会で講師の森先生から聞

いたところによると、地域リーダーの第一要件は、地域に對して情熱と誇りをもち将来展望をはっきりもっていることであり、第二の要件は、創造力とアイデアを持つていることである。また第三の要件としては、行動力、実践力が必要であり、そして、最後に協調性が重要となる。さらに、これをわかりやすくまとめると、地域リーダーは四つの「ち」を開放しなければならぬいそうである。第一の要件は、「ぐち」（愚痴）をやめること、第二の要件は、「むち」（無知）から脱却すること、第三の要件は、「けち」（力の出し惜しみ）であつてはならないこと、第四の要件は、「やきもち」（ねたみ、嫉妬）は無用ということである。

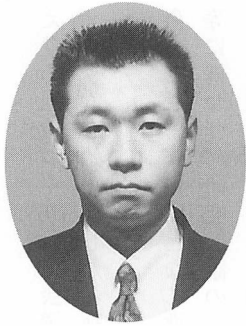
まちづくり人は、これらのことを心がけながら、一歩ずつ実践活動で自らをみがいていくことも大事であると思う。

これからのまちセン活動

財源的には厳しい状況が続くと思われるが、適切な（時代に合った）人材に恵まれており、また研究員OBや地域づくり研究会議のメンバー、県内外のまちづくり人とのネットワークもあり、活動としては、やりやすくなつてきていると思う。とにかく、センターにいて、いろいろな人やまちとの出会いがあり、自分自身を見つめ直したり、みがいたりするには、もつてこいこの場であつたと思う。

今後ともセンターが、まちづくりの情報発信、人材育成の機関として、また、研究員が自ら楽しみ、他の人にも楽しみを発信できる場として、発展することを期待します。

最後に、センターでお世話になった渡邊前所長、渡部所長、研究員の皆様を始め、まちづくり関係者の方々に誌面を借りましてお礼申し上げます。



— 研究員活動を振り返って —

“まちづくりは出会いから”

双海町 大谷 基文
(前研究員)

はじめに

(財)愛媛県まちづくり総合センターに出向した二年間は、本当にアツという間に過ぎていった。「軽い気持ちで、勉強してこい」と送り出されたものの何をすればいいのかよく分からないまま、とりあえず「できるだけ多くのの人に会う」ということを、まちづくり総合センターでの目標とした。

「舞たうん」編集会議

まちづくり総合センターでの活動の中でも情報誌「舞たうん」の編集会議により、まちづくり感というものが分かっていったように思う。特集のテーマを決めるのに所長をはじめ研究員同志で何時間も意見を出し合った。意見を出し合うことよって、自分の考えや思いが、はっきりと見えて来ると共に全員の意識統一ができ、

研究員同志の情報交換により知識が深まっていったように思う。

また、編集のために日頃から県内外のまちづくり情報に敏感になっていったように思う。

そして、何より自分が編集長で取り組んだ「舞たうん」が発行できた時の満足感は、何とも言えないものがあつた。

地域づくり交流研修

県外先進地の情報収集及び地域リーダーやグループとの交流を通して、まちづくり論の研鑽を目的として、県内のまちづくり関係者を集めて実施する交流研修では、研修のテーマ、研修先等の計画を立案させてもらった。

行政主導型でありながら住民参加が上手に取り入れられている福井県の今立町、行政の職員グループの活動から住民を巻き込んだ赤レンガによる町づくりが展開されている京都府の舞鶴市、そして、町

の未来に危機感を感じ、町に對する熱い思いを語る地域リーダーを中心にいろんな人が集まって、まちづくりを楽しみながら活動しているグループを京都府網野町に訪問した。それぞれタイプは違うが、しっかりとした考え(理論)と、それを語り、実行できる核となるリーダーがいるという共通点があつたと思う。

また、まちづくりグループとの交流では、メンバー各自が自分の考えを持っており、それを素直に出し合い本音で語り合うことよって相手を認め、メンバー同士の繋がりが強いものになっているように感じた。

本音で語りあえることがグループ活動の基本であることを実感させられた。

えひめ地域づくり研究会議

愛媛県内に、まちづくりに関心を寄せる人達がこんなに多くいるとは、まちづくり総合センターに行くまで思い

もよらなかつた。

とにかく熱意とパワーそして、自己主張できる個性の集まりが、「えひめ地域づくり研究会」ではないかと思う。

最初、運営委員の方々に会ったときは、その個性とパワーに圧倒されつつ放しであった。

この研究会の事務局をさせていたただいたおかげで、行政とは違う面からのまちづくりの考え方が経験できたと思う。

まちづくり総合センターに来るまでは、「まちづくりは行政が中心で引つ張って行くもの」という思いがあった。

しかし、その思いは大きく違っていた。確かに行政抜きではまちづくりは考えられないだろうが、住民参加がなければ、まちづくりは成功したとはいえないのではないだろうか。そのためにも柔軟な考え方や奇抜なアイデアの必要性そして、ネットワークの大切さを再認識させられた。

まちセンでつくった

出会いという財産

この二年間で多くの県内外の市町村に行くことができた。そして、たくさんの人々との出会いがあった。この出会いこそが、まちづくり総合センターでの一番大きな財産になったと思う。

いろいろな人と、まちづくりに対する考え、情熱を語り合えた事で、「まちづくり」というものが理解できるようになると共に、自分のまちづくりに対する考えが整理できてきたと思う。

また、先進地のリーダーのものの方、考え方が少しも身に付いていることを自分に期待したい。

おわりに

長いと思っていた二年間というものが、終わってみると物凄く短かったように思う。やり残したことがたくさんあ

るような気がして仕方がない。

しかし、とても充実した期間だった事は確かなことであり、自分の町を第三者的な目で見ることができた。この様な経験ができた事はとても幸せに思う。

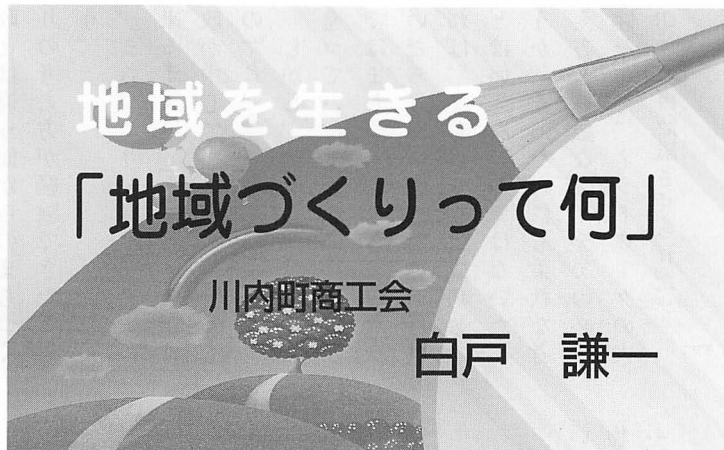
現在、双海町地域振興課に配属され三か月、少し息切れ

ぎみではあるが、「元氣・勇氣・やる氣」をモットーに、まちづくり総合センターで得た、知識と経験を生かし、地域にお返しするつもりで、双海町に新しい風をおこせるよう頑張りたいと思う。

ありがとうございました。



私は川内で生まれ、川内で育ち、そして縁あって川内町商工会に勤めています。仕事



柄、今まで数々のイベント等に参加させて頂き、そこで多くの人と出会い、様々な体験をさせて頂きました。今回、その中で感じたこと、思ったことを寄稿させて頂きます。

最近、盛んに「地域づくり」と言う言葉を耳にします。なぜ今、「地域づくり」なのか、そのあたりから考えてみます。

かつての農村は川内町に限らず、いわゆる「むら型社会」であった為、人々は共同で、農作業や、それぞれの地域社会独自の行事を当たり前のように行っており、人々の結びつきも強く、改めて「地域づくり」など必要ありませんで、ごく自然に地域社会と共に生活を行っていました。しかし、戦後農林業の衰退とともに、村の外へ働きに出る人が増え、農村の人々の生活までも多様化し、それぞれの地域独自の行事にも参加するこ

とが少なくなりました。また、共同で行っていた農作業も機械化により、その必要性も無くなり、人と地域との繋がりは薄れてゆき、共に生きるという観念も薄れ、「むら型社会」から「まち型社会」へ変化して行きました。それに拍車をかけたのが過疎化であったといえます。

私は「地域づくり」とは、それぞれの地域の失われた「アイデンティティー」の復活であると考えます。先ほど述べたように、かつての「むら型社会」には、それぞれのアイデンティティーが存在していました。村のお祭り（娯楽）から農作業、冠婚葬祭に至るまで、それぞれの地域の生活に合った長年培われてきたやり方があったはずです。だから、地域のアイデンティティーの復活とは、そこに住む人々が生活しやすいそれぞれに合った環境づくりであり、人々を地域社会に引き

付ける魅力ある社会を作ることと考えます。

しかし、従来の「地域づくり」はトップダウン方式の行政主導の地域づくりが大半で、いわば「行政にまかせておけばいい」と言うような他力本願の要素が強く、住民が率先して「地域づくり」に参加することは希で、行政の施策・構想に左右されやすいという傾向があります。したがって



上々颯風お花見ライブ

そこに生み出されたものは住民不在の空虚なものになりがちです。各自治体に作られている、箱があつて中身が無い〇〇コミュニティセンターなどが、その最たるものであると考へます。

だからこそ、私は逆に地域住民（コミュニティ）の手による「地域づくり」が必要だと考へます。コミュニティとは「同じ地元に住む人々の集団であり、地域社会・目的・思想・生活を共にする人々の共同社会。」とありますが、自分達の地域社会だからこそ、「何とかしなくては」という意識を持ち、それを自覚した人々によって、共通の地域への帰属意識と、例えばイベントの成功という具体的な目標に向かって、それぞれの役割を担いながら、共通の行動をとろうとする、それこそが、真の「地域づくり」ではないでしょうか。そして自分達の住む地域をよく知って、自分達の考へを行政へと

ボトムアップすることが大切と考へます。

では、その為に一体何が必要でしょうか。私はコミュニティリーダーだと考へます。事実、地域の活性化に成功している市町村には必ずといっていいほど強烈な個性を持つリーダーが存在しています。（基本的に意欲を持っている人なら誰でもいいわけですが、やはりある程度の人望と経験は必要でしょう。）地域住民主導の地域活性化のイベント等は大半が手作りですから、頼みの綱は人の力です。そこでコミュニティリーダーを中心とした人の輪（コミュニティセッション）を作ることによりコミュニティリーダーが個々の繋がり薄い人々を繋げる一種のメディアの役割を果たし、より強固な輪へと成長させるからです。だからこそ、コミュニティリーダーを見付ける、あるいは育てることは、人の輪を育てることであり、それは今後の「地域

づくり」の基盤となり、財産になると思ひます。

四月に、川内町で「上々颱風お花見ライブ」というイベントが行われ、小さな町の小学校の体育館に約千名の観衆を集め、大成功を収めました。このイベントは町内の二十代から五十代の約三十名の有志によって組織された実行委員会によって企画・運営され、私も事務局の一人として参加させて頂きました。

このイベントは、ある人によつてもたらされた情報（企画）がコミュニティリーダーを介することにより、より具体的・現実味を帯びた情報（企画）となつて人々に伝わり、リーダーとしか結びつきが無かつた人々が、それぞれの結びつきを強くし、イベント成功の原動力となりました。おそらく、このイベントも決してコミュニティリーダー抜きでは、成功はおろか、話も立ち上がっていないかと思ひます。

よく「まちおこし・むらおこしのイベントは単なる非日常的一過性のものに過ぎず、あとに残るものは何も無い。」という意見が聞かれますが、この多様化した時代に、確立し難い「地域アイデンティティー」の復活と生活しやすい環境づくり、人々を引きつける魅力あるまちづくりを行うためにはどうしてもイベントは必要であり、イベントを行うことにより、人と人との交流が生まれ、それがあらゆる面で基盤となつて「地域づくり」に繋がると思ひます。だから、私は「地域づくり」は「人づくり」でもあると考へます。

今後、私が川内に住み、川内という地域で生きてゆく上で、様々な機会をとらえ、より多くの人達と交流を深めることによつて、地域づくりに貢献したいと思ひますし、そのことが自分自身の成長にも大きな意味を持つと思ひます。

風おこしのちかい

「シゴトの現場で出会うこと」著者 宮本清幸

えひめ地域づくり研究会 議運営委員

宮本 清幸



私の「シゴトの現場」というところでは、毎年三月下旬の「風」の吹き様で、自分の直接のシゴトの内容が毎年とか二、三年とかの間隔で変化する。一方では、十年以上も変わらない戦士もいる。シゴトの姿勢というか向きとかそういうものは組織内部完結型ではないはず、常に町民に向いているはずだから、間隔の長短が特に深刻となる

ことはないが、「要領」を得るのにはしばらくの時間を要することは確かである。

問題はA課が担当する事業についてB課、C課に協議することがある場合など。その事業は当然のことながら「まぢの幸せづくり」の事業であるはずだから、協力して何とか良い事業にと検討すべきなのに、そのところが忘れられて、お互い積極性のない、前向きでない協議が進行することが多々あることだ。

もうひとつ、組織内部の人たちの間でも、外の人たちの間にも、組織の各部門を差別化し、要・軽視している発言

をよく耳にする。AからBに移れば要、BからAに移れば軽とか。そうであるのならAとBをCに再編すればよいはず。「まぢの幸せづくり」にAもBも欠かせないセクシオンであるのならAとBに要・軽の差があるうはずがないではないか。要は、みんな「そこで翔べ」なんじゃないのか。そこで翔べない者が他所で翔べる訳ないよね。それは「今はやらないが、いざとなった時はやるぞ」という翔べない鳥の言い訳だ。

●風よ吹くな

私のような田舎者は、東京のお店にはいつて「ふるさと」を体験したりすると心地よく、ほっとする。地方の観光地によく旅をして「東京」を感じると不愉快になる。都会人間が「ふるさと」に来て「東京」に出会って「くつろぎ」を感じ、ほっとするだろうか。美しい日本の美しい山を削ってホテルを建てて「日本人」が

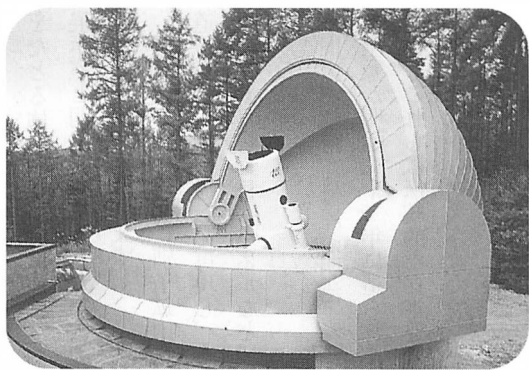
「東京人」が喜んで泊って行くだろうか。自然はそこに足を運んではじめて「自然」。眺望は自然の中に足を運んではじめて感動。

爽やかな風は吹いてほしいが、「ふるさと」に「東京」の風を吹かす田舎者はまっぴらだ。

●春はいつ来る地方の時代

地方の時代が言われて久しいのに、今だに言い続けられている。「春になったら出直したいと・・・」歌の文句じゃないけれど。

長野県南佐久郡に臼田という、直径六十四mのパラボラアンテナ、口径六十cmの天体望遠鏡を備えたスタードームのある「星の町」がある。数年前から私の町と臼田町は、両町に工場を有する某会社の文化戦略というか、お世話によって、小学生たちが交流活動が続いている。この五月十七、八の両日、新町制施行四〇周年記念式典と昔から続い



ている小満祭こまんさい（二十四節気のひとつ「小満」から由来）にお誘いを受け同僚と二人で出掛けた。白田については聞き及んでいたが、見ると聞くとでは大ちがい。三役はじめ議会人も仕事的や役職的な雰囲気がなく、無口な私でさえ話して退屈ではなかった。ヒトもモノも「派手さのないまち」の印象だった。

その古典の記念講演も爽やかだった。司会者の講師紹介

によるとその道日本で五本の指にはいるという秋山智弘氏。「ある夜、車を走らせて峠の道を越えようとしたら、タヌキやキツネやウサギどもが道に出て、森の国の閣僚会議を開いておった。ライトにびつくりした閣僚たちは茂みに場所を移して会議を続けた。車の人間がライトを消して近づく」と「また人間どもが俺たちの住み処に何かデツカイことを考えているみたいだぞ」峠を越える白田のみなさんには、

『みんな、心配するなよ、大丈夫だよ』と言ってやれる人間になっていただきたい。モノや眺望でヒトを呼ぶ時代ではないと思います。」こんな話だったか。

温泉が出たぞ。温泉館を建てよう。あんな何もない所ではダメだ。引湯して、あの山をバツサリ削って、そこに建てようぜ。眺望はいいし、人は来るぞ。

他所の町に何かができた。ちよつと見に行く。あれ、い

つまで続くの。それって心配してんの、ヤジウマなの。いいじゃないの。他所のことで自分ちのこと考えなさいよ。あんたんち、モノもないけどヒトもないね。あんたんちに来て、他所のヒトが一番うれしいのは施設や眺望じゃない、あんたんちの「ヒト」に会えることじゃないの。

地方の時代、何だか時代環境に振り回されているようでしたかがない。

●某プロデューサーの企画ノート

最近、友人から本が届いた。療養中の鶴見和子さんの歌集「回生」、もうひとつが現代の世相シリーズ第五巻「祭りイベント」（小松和彦編・小学館）だ。その中にプロデューサーの某が哲学ともいえる企画ノートを記している。

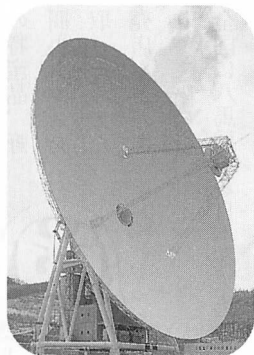
（しないこと）

- 一、新しい建築物はつくらない
- 一、無理な資金計画はしない
- 一、開発思想は絶対に乗げない
- 一、他所の成功事例の真似を

しない
一、先進性を競うことはやらない
（したいこと）

- 一、仕込みにたつぷり時間をかける
- 一、会議から本業の肩書は除外する
- 一、中央の有力メディアに売り込みをする
- 一、企画書や報告書など文書を大事にする
- 一、人材の育成に全力を投入する

こんなこと、私にはとてもできっこないが、思ったり、考えたり、頭の隅っこに置いておくことくらいならできそうだ。



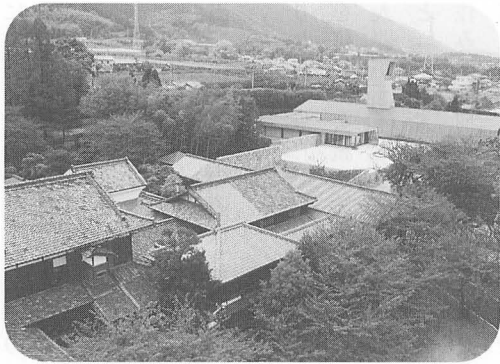
直径64mのパラボラアンテナ

『広瀬歴史記念館』
オープン
新居浜市

広瀬歴史記念館は、幕末・明治期に日本の近代産業を育成した広瀬宰平の足跡を通して、新居浜市の生い立ちと日本の近代化の歩みをたどる施設です。この施設は、展示室と明治に建築された旧広瀬邸から構成されています。

展示館では導入部に別子鉱山鉄道の岩壁の切り通しを再現し、また映像や実物資料、パネルなど展示しています。

旧広瀬邸は、母屋が明治十年、新座敷が明治二十二年に造られました。これらは伝統的な日本建築の中に欧米から輸入されたマン托ルピース・洋式トイレ・板ガラスなどの新しい文化を取り入れてい



ます。
〈開館時間〉

午前九時三十分～午後五時三十分
(受付時間 午後五時まで)

〈休館日〉

月曜日 国民の祝日の翌日(日曜日を除く)・年末年始

〈問い合わせ先〉

広瀬歴史記念館

☎〇八九七―四〇―一八三三三

グ～ンと広がって
楽しさ倍増
『野間馬ハイランド』
(リニューアルオープン)
今治市

今治市原産で約三百六十年の歴史を持つ日本最小の在来馬である野間馬に会えるのが野間馬ハイランドです。手狭となった厩舎・放牧場の増設など飼育環境の改善と二年後の本四連絡橋開通に向けた本市固有の観光施設として約四倍の五万五千平方メートル余りに拡張、内容の充実を図りこのほど四月二十六日にリニューアルオープンしました。乗馬広場・小動物ふれあい広場の拡充をはじめ遊具広場・わんぱく広場・いこいの広場なども新設されました。なかでも二階建て円筒形の「まきば館」は、シンボリックな建物となつています。一階は、喫茶コーナーや地元

の特産品、野

間馬グッズを

取りそろえた

売店などがあ

り、二階には、

全国に八馬種いる日本在来馬のブ

ロonzのほか映像やパソコンを使

つて楽しみながら野間馬を知ること

ができる「野間馬ものしり教室」

があります。オープン以来、人と

動物とがふれあうことができるフ

ァミリーパークとして家族連れや

子供達で賑わっています。ぜひ一

度ご来園下さい。

〈休園日〉

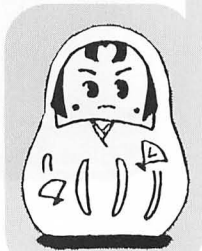
毎週火曜日(祝日と重なった時は翌日)

〈問い合わせ先〉

今治市野間馬ハイランド

☎〇八九八―三二―一八二五五

☎〇八九八―三二―一八二五五





スポーツを楽しんでもらう公園となつています。
心と体のリフレッシュに是非

平成九年四月にオープンした「いきなスポレク公園」は、ナイター照明のある野球場、バレーコート二面のスペースが取れる体育館、サウナ室を完備した温水プールなど様々な機能を併せ持つスポーツ総合公園施設です。

また、隣りには宿泊施設「蛙石荘」があり、研修・合宿には最適な場所となっており、大学・高校のクラブ、同好会、愛好会、家族など多くの人たちにスポーツを楽しんでもらう公園となつています。

瀬戸内のスポーツランド 『いきなスポレク公園』 オープン 生名村

一度、ご利用して下さい。

〈開館時間〉

午前九時～午後十時

〈使用料〉

野球場 一時間 千円

体育館(アリーナ)

一時間 八百円

プール 小中学生 百円

高校生 二百円

大人 三百円

〈休園日〉

毎週火曜日、祝日の翌日、年末年始

〈宿泊〉

蛙石荘

お一人様五千円より

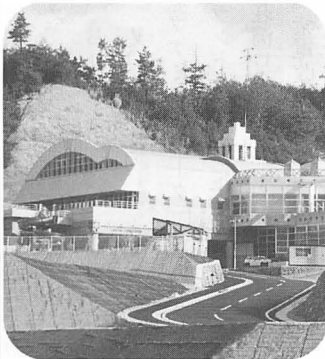
〈問い合わせ先〉

いきなスポレク公園

☎〇八九七―七四―〇九〇六

蛙石荘

☎〇八九七―七四―〇九〇九



知恵の蔵 『久万町立図書館』 オープン 久万町

自然と共生する高原文化のまち久万町に、七月一日「久万町立図書館」がオープンしました。

床面積九九九・五㎡の木造平屋建て、蔵書冊数約二万五千冊、収蔵能力約七万冊。雑誌やAV(オーディオビジュアル)資料も備え、VTR等の視聴ができます。

館内は車椅子やベビーカーでも行き来できるよう、バリアフリー方式とし、ゆったりくつろげるスペースをとっています。

また、来館できない方にもご利用いただけるよう、定期的に移動図書館車(やまびこ)を走らせま

す。
なお、運営、管理をコンピュー



タ化し、貸出しや返却がカード一枚で簡単にできるようにしています。どなたでも利用できますので、利用カードの登録をしてください。

緑に囲まれた高原の町の図書館で、ゆっくりお気に入りの一冊を見つけてみませんか。

〈開館時間〉

・火～土 午前九時半～午後六時

・日 午前九時～午後五時

〈休館日〉

毎週月曜日・第三日曜日・月末整理日

祝日・年末年始・特別整理期間

〈問い合わせ先〉

久万町立図書館

☎〇八九二―五〇―〇四一五

コバルトブルー宇和海
ロマンの夕日遙か
『南レク
オートキャンプ場』
津島町

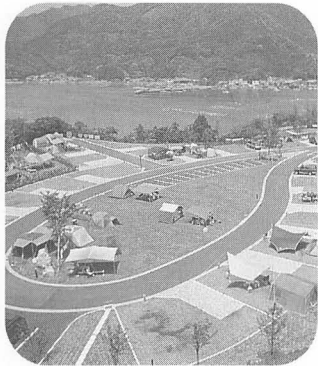
南レクオートキャンプ場は、南予レクリエーション都市事業の一環として、愛媛県が事業を進め、自然環境を有効利用し、家族やグループで気軽に楽しめる体験型レジャー施設としてオープンしました。

キャンプ場は高台に位置し、真珠養殖の盛産地、アス式海岸が一望でき、夕方には海に沈む夕日を望む事も出来ます。

施設には、キャビン、カーナビ、一台ずつ利用出来る「個別サイト」も併設して、場を利用する「フリーサイト」があり、中心となるキャンパスハウスは、炊飯場・シャワー室・洗面所・トイレ・救

護室があり洗濯機や乾燥機を備え、各種レンタル用品も取り揃えております。

又、隣接施設として「南楽園」「ファミリーパーク」「津島プレーランド」のほか足を伸ばすと「御荘湾ロープウェイ」「展望タワー」「紫電改保存館」「南レクジャンボプール」があり、子供から大人まで幅広く楽しんでもらえる施設を用意しておりますので、是非お越し下さい。



〈開園期間〉

四月二十五日～十月三十一日

〈問い合わせ先〉

南レクオートキャンプ場

☎ (〇八九五) 三二一六二二

(FAX兼用)

*ご予約は、ご利用期間の三ヵ月前から受け付けます。

物産販売所
『フレッシュ一本松』
オープン
一本松町

一本松町では、町民の憩いやふれあいの場、そして交流の拠点として整備中のあけぼのりフレッシュゾーンに、物産販売所「フレッシュ一本松」がオープンしました。

現在の農林業を取り巻く厳しい状況を踏まえ、生産者の生産意欲の向上と高齢者の生きがいづくりにつなげようと、第三セクター経営による物産販売所を設置しました。

施設名は、一般公募により、「新鮮」なイメージを大切にしようということで、「フレッシュ一本松」(中川地区清水 香さん命名)といたしました。

年間一、〇〇〇円の登録料をい

ただければ、町内・町外を問わず誰でも出荷者となる

ことができま

す。新鮮な野菜・穀物・山菜・果樹・林産物・水産物・花卉・工芸品・その他加工品、そして、人気の手作りアイスや町特産の黒毛和牛などを販売しております。

是非、一度お越しください。

〈営業時間〉

午前九時～午後六時

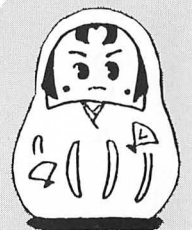
〈定休日〉 毎週火曜日

〈問い合わせ先〉

一本松ふるさと株式会社

☎ (〇八九五) 八四一三五五五

支配人 源良行



☆まちセンからのお知らせ

『ふるさとづくり文化講演会』開催地募集

愛媛県まちづくり総合センターでは、地域資源を活かし、輝きとにぎわいのあるふるさとづくりを進めていくため、県外の先駆的まちづくり実践者等を招いての講演会を、今年度、県下1か所で開催することにしています。

ついでには、その開催場所を提供して下さる共催市町村（広域市町村圏を含む）を募集いたします。概要は、次のとおりです。詳しくは、まちセンまで。

- ① 講師謝金とその招へい旅費は、センター負担
- ② 会場、看板等は、開催地市町村等負担
- ③ 講演記録集を、センターで編集・発行

— BOOK INFORMATION —

●輝爆剤六輔参上

和田芳治 著

B5版 時価(1,000円?)
夢工房 (0824-66-2317)

ご存知『過疎を逆手にとる会』を創った広島県総領町の和田さんが書いたカソサカ15周年記念誌。カソサカの原点とその歩みがわかります。

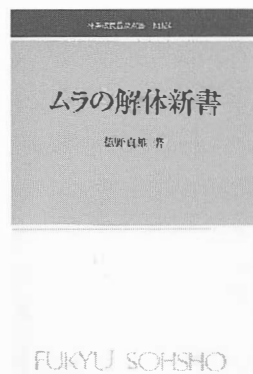


●ムラの解体新書

徳野貞雄 著

新書版 923円(税別)
全国林業改良普及協会

そのカソサカ主催の逆手塾の過激なまとめで、知る人ぞ知る徳野先生が、農山村に住み暮らす『ヒト』の視点から過疎問題を解剖しています。

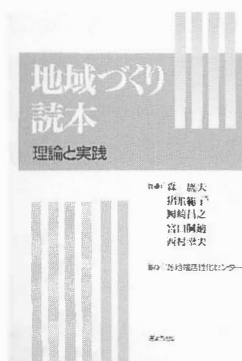


●地域づくり読本

森 巖夫ほか 著

A5版 1,456円(税別)
ぎょうせい

(財)地域活性化センター主催の『全国地域リーダー養成塾』の主任講師陣が、塾を受講できない全国の地域づくり関係者のために書き下したまちづくりの入門解説書です。

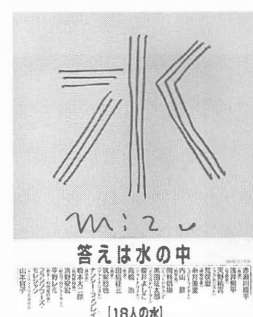


●水

赤瀬川原平ほか 著

A4版 2,095円(税別)
四万十ドラマ (08802-8-5527)

日本最後の清流四万十川流域の西土佐村、十和村、大正町でつくる第3セクター四万十ドラマが企画・制作した『水』の本。18人の著名人が、それぞれの水への思いを語っています。



お知らせ (愛媛県市町村振興協会)

平成9年度市町村振興 サマージャンボ宝くじ

☆賞金は、1等・前後賞あわせて 1億5,000万円。

☆ラッキーレジャー賞 5万円×126,000本(42ユニットの場合)ほか

今年、当たり実感のある少額賞金を大幅に増やしています。

☆1枚 300円、予約引換券は不要です。

☆発売期間 7月22日(火)～8月8日(金) 抽選日 8月19日(火)



迫力の夏体験。

'97市町村振興宝くじ

サマージャンボ

1億5,000万円

1等・前後賞あわせて
1等8,000万円(前後賞各4,500万円)

7月22日(火)発売

発売期間 7月22日(火)～8月8日(金) 抽せん日 8月19日(火)

収益金は、市町村の
明るく住み良い街づくりに使われます。

財団法人 全国市町村振興協会/全国市長会/全国町村会/全国市議会議長会/全国町村議会議長会

ユニークなまちづくりイベントとして全国的な注目を集めている城川町の「かまぼこ板の絵」展覧会が七月二十七日から始まります。

当「舞たうん」の表紙を毎回飾っていただいている柳原先生の作品「サンタの休日」も県知事賞受賞作として展示されます。ちょっと出かけてみませんか。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

『舞たうん』編集係まで

〒790 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL089(932)7750

FAX089(932)7760

発行/平成九年七月二十日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

(財)愛媛県市町村振興協会